

8月14日のウクライナ情報

安齋育郎

●ウクライナのプロパガンダ映像ロケ光景(2022年8月12日)

ゼレンスキー政権下のウクライナの日常…プロパガンダ映像ロケ光景(後ろから隠し撮り?)

<https://twitter.com/sinoppa1960/status/1558055562679828486?s=09>

※安齋注:ウクライナの元社会党のリーダーで、最高議会議員のイリヤ・キヴァ氏は、「ブチャの悲劇は演出されたもの」と言った時、「誰も理解しようとしませんが、今のウクライナ政府は脚本家とビデオ編集者で構成されているんだ」とも述べたことを思い出します。

●ウクライナでの志願状況(2022年8月12日)

ウクライナ軍への志願者が大幅に減少していることを、同国の徴兵センター長が認めた。戦争に負けつつあるだけでなく、ウクライナは士気を失っているという。

https://twitter.com/2018_apc/status/1557787739160190976

※安齋注:この映像は英語で、まだ日本語字幕は付いていません、概要以下の通り。

徴兵センターに来る人は少なく、しかも多くは徴兵猶予や傷病治療などの手続きのために来る。今は100人の市民中、志願するのは3人だけという状況だが、当初は兵役猶予証明をもって来る人が100人中3人しかいなかった。

徴兵センターで働く100人のうち、ウクライナ人はわずか3人。ウクライナの総動員令は8月23日まで延長された。ロシア国防省によれば、ウクライナ側で2日間に500人以上の犠牲者が出た。

スコット・リッター元米国海兵隊情報将校:「誰だって負け戦のためにサインしたくはない。士気が低下しており、西側とキーウ(キエフ)はウクライナ軍の勇気を誇張している」。

●ブチャからの避難して人と犬の再開(2022年4月6日)

※安齋注:ブチャから避難した飼い主が犬と再会した様子の映像。飼い主がどんな人かなど、良く分からない映像ですが、2万人以上の方が映像を見ていました。こういう映像は一種の「感動もの」で人気があるんですね。

<https://twitter.com/runabout2525/status/1511493119392423936?t=BwbssbU5EeeZ7jyPYR0iQ&s=09>

●アメリカにおけるゼレンスキーの見方の変化(2022年8月14日)

※安齋注:フォークシンガーの原伸一さんの解説です。私は原さんとお会いしたことはありませんし、お考えの全容を理解している訳ではありませんが、その時々原さんが取り上げているニュースは興味深いですね。参考にして下さい。ニューズウィークの最近の記事を紹介しています。

<https://youtu.be/SWBqWEkcaOo>



●セベロドネツクの住民が語るウクライナ軍の砲撃(2022年8月12日)

住民の証言「ウクライナ軍は攻撃対象が民間人かどうかなんてどうでもいいんです」。

<https://youtu.be/doKtGRyB4Zg>

●クラマトルスク駅に対するミサイル攻撃事件(2022年4月19日)

※安齋注:「クラマトルスク駅爆撃事件」とは、「2022年4月8日の朝にロシア軍がクラマトルスク市からの避難民に対して行なったミサイル攻撃」とされているものです。3月末から4月にかけてのこの時期、ウクライナは「和平」から「戦闘」へと方向転換した時期で、ブチャの大虐殺やらロシア兵少女レイプ事件やら、やたらにフェイクニュースを流して世界に「悪魔のと闘う正義のウクライナ」を演出、世界に武器支援を求め始めていた時期でした。このクラマトルスク駅爆撃事件も「ロシアの仕業」とされ、今でも信じている人が多そうなので、スコット・リッター(元アメリカ海兵隊情報将校、国連兵器査察官)の詳細な報告を改めて紹介します。

クラマトルスク駅に対するミサイル攻撃事件について、元国連兵器査察官のスコット・リッター氏が新しい指摘をしています。

このミサイル攻撃については、使用されたトーチカ U がロシア軍ではすでに退役しているにも関わらず、ウクライナ側は一方的にロシアが犯人だと宣伝し、一部の論者は戦争初期にベラルーシでロシア軍のトーチカ U の発射機が撮影されていたと主張しました。

一方、ミサイルの製造シリアル番号はウクライナ軍が過去に使用したトーチカ・ミサイルと同じロットに属していることを示し、ウクライナによる発射を根拠づけていました。今回、リッター氏が、ミサイルの通常の挙動から発射方向が推定できそれはウクライナ部隊だとしていることは重要なことです。しかも、米もロシアも発射されミサイルの軌道のデータを持っている(公表しないだけ)からウクライナが言うように戦争犯罪の裁判になれば、ゼレンスキーが犯人として訴追されるのでしょうか。

クラマトルスク駅襲撃事件:犯人逮捕の鍵はこの見過ごされた詳細にあります
キエフとその欧米支援者たちは、即座にこの事件でロシアを非難したが、適切な調査を行えば、そうはならないだろう

スコット・リッター(元米海兵隊情報将校)

<https://www.rt.com/russia/554138-kramatorsk-train-station-attack/> (英語)

ロシアとウクライナの間で日々、不正行為の非難が飛び交う紛争において、2022年4月8日午前10時半に発生したクラマトルスク駅へのミサイル攻撃に関しては、双方の意見が珍しく一致している。使用されたミサイルはトーチカ U (Tochka-U)、ソ連時代の兵器で西側では NATO 名称 SS21 スカラベ、旧ソ連共和国では GRAU 名称 9K79 で知られているものである。

しかし、その 1 つの技術的な情報を超えて、そのミサイルがどのようにしてにぎやかな鉄道駅を襲い、ロシアの大規模な攻勢を予想してウクライナ東部から必死に避難しようとしていた何十人もの市民を死傷させたかという物語に関しては、それぞれの側が相手を非難したので一致した見解は崩壊してしまった。この悲劇をさらに異様なものにしたのは、ミサイルにロシア語の「ザ・デテイ」(子供たちの

ために)という言葉が手描きで白く塗られていたことだ。

トーチカがソ連軍に登場したのは 1975 年。単段の固体燃料式戦術弾道ミサイルで、ボトキンスク機械工場で組み立てられた後、ソ連軍に納入され、さらに各部隊に装備され普及した。1989 年には、射程距離と精度を向上させた改良型「トーチカ U」(Uluchshenny、「改良型」の意)が導入された。

トーチカ U は、単純な慣性誘導弾道ミサイルとして運用される。発射地点から着弾地点までの距離を計算し、ターゲットに照準を合わせて発射する。トーチカ U の固体燃料エンジンは 28 秒間燃焼する。つまり、ミサイルの射程はエンジンの燃焼時間だけでなく、ミサイルの発射角度で決まる。

ミサイルの燃料は燃焼して消耗するため、エンジンが停止すると純粋な弾道軌道をやめ、垂直に近い姿勢で目標に向かっていく。弾頭は標的の上方の指定された地点で放出される。クラマトルスクの攻撃では、トーチカ U は 50 個の子弾を含む 9N123K クラスタ弾頭を装備しており、それぞれの子弾は爆発力と致死性の点で手投げ弾 1 個分の効果がある。

トーチカ U の飛行特性は、まずクラスタ弾が地上に着弾し、次に弾頭の着弾から少し遅れて燃焼し終わったブースターが地上に着弾するという破片パターンになる。これはいわば、ミサイルが発射された方向を示すサインであり、弾頭の着弾点からブースターを經由して逆方向の方位を撮影することで簡単に算出することができる。

この物理的な現実こそが、クラマトルスクに命中したトーチカ U を誰が発射したかを知る最初の手がかりとなるのである。クラスタ弾の着弾地点とブースターの位置関係から、逆方向の方位が得られる。この方位は、潜在的なドリフトの誤差を考慮しても、ウクライナ政府の独占的支配下にあった領域を指しており、つまり、クラマトルスク駅を襲ったミサイルは、ウクライナ唯一のトーチカ U 装備部隊、第 19 ミサイル旅団の作戦統制下にあった発射機で発射されたことは疑いようがないのである。具体的には、ミサイルの残骸を鑑識した結果、クラマトルスクから約 45 キロ離れたドブロポリャ近郊に拠点を置く第 19 ウクライナ・ミサイル旅団が発射したことが明らかになったのである。

第 19 ミサイル旅団は、ウクライナ地上軍司令部の指令に直接対応する戦略的資産とみなされている。つまり、もしミサイルが第 19 ミサイル旅団によって発射されたとすれば、それは上位の指揮系統からの命令に基づいて行われたことになる。発射は偶然ではないのだ。

ウクライナ政府は、ロシアが 2019 年に現役を退いたと記録されているミサイルを使った攻撃について、ロシアを非難し、脚本をひっくり返そうとしている。この主張を裏付けるために、ウクライナ政府は、ロシアがウクライナに対して特別軍事作戦を開始する前夜の 2022 年 2 月に、ベラルーシ国内でロシア軍とベラルーシ軍の共同軍事訓練にトーチカ U の発射機が参加しているのを目撃されたことを指摘している。

これは、ウィーンの国際機関へのウクライナ常駐代表であるエフゲニー・ツィンバリウク大使が、この攻撃について OSCE 常設理事会の特別会合で演説した際に述べたものである。

米国はウクライナの主張を支持し、国防総省は記者への非公開のブリーフィングで、ロシアは当初、クラマトルスクへのミサイル攻撃を発表したが、民間人の犠牲者についての発表があった時点でそれを撤回したと発表している。

キエフとワシントンの主張の問題は、どちらも確かな証拠らしきものによって裏付けられていないこ

とである。ウクライナ側が言及したテレビ画像は、ロシアのものではなく、ベラルーシのトーチカ U の発射台を映したものであり、米国が引用した「主張」は、ロシア政府や軍とは何の関係もない人物のプライベートなテレグラムアカウントを引用したものであった。

ロシアも米国も、トーチカが発射された場所の事実上の証拠を持っていることに疑問の余地はない。米国はこの地域に様々な情報収集プラットフォームを配備しており、発射時のミサイルの位置を探知し、目標に向かって飛行するミサイルの弾道も追跡できたはずである。同様に、ロシアは S-400 を含む多数の地対空ミサイル防衛システムを配備しており、ミサイルの発射から着弾までの飛行を追跡することができたはずである。

米国が、キューバ・ミサイル危機のような瞬間を国連で再現し、ロシアの嘘の範囲と規模を世界に示すために、このデータの機密指定を解除しなかったという事実は、ロシアが実際には嘘をついていないことを強く示唆している。さらに、ウクライナがミサイルを発射したという主張を補強するためにロシアが同じことをしなかったのは、ロシアのレーダーは活発な軍事行動地帯の一部として作動しており、そのためロシアは戦場での戦術的優位をウクライナに提供できるデータを公表したくないという現実を指し示している。

しかし、クラマトルスクに発射された問題のトーチカ U ミサイルの所有者が誰であることを確実に証明する証拠が一つあり、それを公開することは提供国の安全保障上の利益を損なわない。ミサイルのブースターに黒く塗られているのは、トーチカ U の製造時に割り当てられた固有の製造番号(キリル文字で Ш91579、ラテン文字で Sh91579)。この製造番号はボトキンスク機械製造工場で割り当てられ、ミサイルのライフサイクルを通じて固有の識別マークとなる。

ユニークな識別子としての製造シリアル番号の使用は、イラクの SCUD ミサイル在庫の会計処理に関する一連の立ち上がった科学捜査の一環として、イラクの国連で使用された。国連は、ソ連製 SCUD ミサイルのイラクへの到着を追跡し、その最終処分(イラク人の手による一方的な破壊、訓練中、整備中、戦闘行動中など)を説明するために、この番号を使用したのである。イラク人が使用した SCUD ミサイルの追跡と会計処理の手順は、ソ連の公式手順に由来するものであり、したがってウクライナ政府が使用したものと同じものである。

トーチカ U の製造番号から、ソ連統治時代の 1991 年に製造されたことがわかる。当時、トーチカ U がボトキンスク機械製造工場で完全に組み立てられると、それは国防産業省に属することになる。ボトキンス工場から鉄道で輸送されたミサイルは、ソ連軍に引き渡され、正式にソ連軍の在庫として組み込まれる。ミサイルには「パスポート」と呼ばれる書類が添付され、ミサイルに関わる全ての取引が記録されている。ミサイルは作戦部隊に配属されるか、保管部隊に配属されるか、その詳細もまたミサイル・パスポートに記録される。

ミサイルの寿命は 1 発につき 10 年で、それを過ぎるといわばメーカーの保証が効かなくなる。つまり、1991 年に製造されたミサイルは、通常であれば 2001 年までに退役することになる。しかし、ロシア軍では、トーチカ U のようなミサイルのライフサイクルを延長するための点検作業を実施し、運用寿命を延ばすことがしばしばあった。このような検査は、ミサイルの取り扱いや移動が行われたすべての作戦展開や実地訓練と同様に、パスポートに記録される。

ミサイルが発射される前に、そのミサイルは正式に保有部隊の在庫から外され、ウクライナ参謀本部によって、問題のシリアルナンバーを含む使用許可命令が出される。ミサイルが発射されると、ミサイル・パスポートは閉じられ、ミサイルの支出に関連する他の書類と一緒にされる。ミサイルのシリアルナンバーは各段階で記録される。

ロシア軍は、ソ連崩壊時にウクライナに引き渡されたトーチカ U ミサイルのリストを公文書として保存しているはずである。同様に、ウクライナ軍には、このミサイルがウクライナ軍に吸収されたことを記録した文書があるはずである。いずれにせよ、所有権について議論の余地のない記録は存在する。同様にウクライナも、ソ連当局からトーチカ U を受領した際の書類のコピーを提出することで、ウクライナ側が当該ミサイルを保有していなかったことを証明することが可能である。

ウクライナのヴォロディミル・ゼレンスキー大統領は、クラマトルスクへのミサイル攻撃について、国際刑事裁判所に構想している「法廷での罪状の 1 つにしなければならない」と明言した。「ブチャでの大虐殺のように」「他の多くのロシアの戦争犯罪のように」。

ゼレンスキーは自分が何を望んでいるのか、注意した方がいいかもしれない。クラマトルスク駅爆破事件の真相究明には、関与したミサイルの調査が含まれ、ブースターに刻まれたミサイルのシリアルナンバーが所有権に関する問題の主演になるだろう。もしこれが本当にそうなら—そして入手可能な証拠はそれを強く示唆している—、ゼレンスキーと彼の指導部は、彼が保護していると主張するまさにその市民の命を虐殺した罪で訴訟事件簿に載ることになるだろう。

◆スコット・リッター

スコット・リッターは元米海兵隊情報将校で、「SCORPION KING: America's Suicidal Embrace of Nuclear Weapons from FDR to Trump」の著者。INF 条約を実施する査察官としてソ連に、湾岸戦争ではシュワルツコフ将軍の幕僚に、1991 年から 1998 年までは国連兵器査察官として勤務した。